近世後期江戸語から明治期東京語における「動詞連用形＋ます」の使用

山　田　里　奈

1. はじめに

本稿は、近世後期江戸語から明治期東京語における「聞き手に関する[1]動詞連用形＋ます」（以下、「動詞連用形＋ます」）の使用について明らかにすることを目的としている。現代日本語では、「特に近年は尊敬語や謙譲語を用いず、対者敬語の「です」「ます」だけで（あるいは美化語で）済ませようとする傾向が見受けられる。（辻村・川岸（1991）P.218）」と説明されるように、「です」や「ます」で文末を収めることによって聞き手に対して丁寧さを表す[2]。近世後期江戸語では、尊敬語・尊敬表現形式に「ます」を下接する場合（以下、「尊敬表現形式＋ます」）の待遇段階は「第一段階（最高敬語）（山崎久之（1966））」、「段階Ａ（小島俊夫（1974））」とされ高い敬意を表す。しかし、本稿が対象とする「ます」の前が通常語での使用、つまり、「動詞連用形＋ます」の使用については、管見の限り、近世後期江戸語の体系表にはなく、明治期東京語の体系表内にはあるものの詳しい説明はなされてこなかった。

そこで本稿では、近世後期江戸語から明治期東京語における「動詞連用形＋ます」の待遇表現の体系表上での位置づけとその特徴について述べる。これにより、丁寧語「ます」の使用変化の一端を明らかにできると考えられる。

2. 先行研究と問題の所在

先行研究について述べ、問題の所在についてまとめる。

1　聞き手の能力や状況等も含むため、「関する」とした。

2　辻村・川岸（1991）は次の例を現代語の「対者敬語の発達」の特徴的な例とする。
（例）○○行の電車をご利用の方は、降りましたホームの×番線でお待ち下さい。
（P.218）（山田注：「お降りになりました」）

2.1　近世後期江戸語から明治期東京語における「ます」の使用

近世後期江戸語における待遇表現の体系表は、山崎（1966）や小島（1974）に示されている。「1. はじめに」で触れたように、「尊敬表現形式＋ます」は当期を通して高い敬意を表す。近世後期江戸語の体系表では、「動詞連用形＋ます」は位置づけられていない。「ます」は謙譲語から丁寧語に変化した語であるが、本稿が扱う近世後期から明治期には、丁寧語として一般的に使用されている。山田（2022）では、近世後期江戸語における〈行く・来る〉の丁重語と「〈話し手が行く・来る〉場合の通常語＋ます」との比較を行ない、〈対等〉の関係において、中流女性は「ます」を伴わない丁重語「まいる」を用いることを指摘した。また、小松（1961）が「ます」について、「人情本では、「あつたりなかつたり」の状態が単なる「なし」から「あり」への過渡的状態としてでなく、独立した領域をなしている。〈中略〉元来、「あつたりなかつたり」状態の形成は「です」未発達という事情によるところが大きいけれどもけつしてそれだけでなく、〈中略〉人情本では、「お……だ」のようにもともと「ます」と結合しようのない敬語がさかんにもちいられているわけで、「お……だ」のあるかぎり、「ます」は今日ほど勢力はふるえないわけである。(P.119)」と述べている。したがって、丁寧語「ます」が文末になくても聞き手に対して敬意を表すことができたのは近世後期江戸語の一つの特徴といえる。

明治期東京語における待遇表現の体系表は、小島（1974）に示されている。体系表中の「動詞連用形＋ます」は、「19 世紀東京語（19 世紀後半、言文一致体の会話による小説）」の体系表中、「旧時代的東京語」、「新時代・公共的東京語」ともに、「段階B_1（＝話し相手に対する話し手の、礼を失しない範囲での、くつろいだ敬意。対等に相互に中流以上の階層がひろく使用。）」と「段階C_2（＝上位の話し手が下位の話し相手に対して、故意に、敬意を反映することばづかいをして、尊大（ばあいによっては、うらがえしの親愛）を誇示する。）」に所属させている。近世後期江戸語からの扱いに変化があったと考えられる。

したがって、近世後期江戸語から明治期東京語において、「ます」は丁寧語として一般的に使用されていたが、「聞き手に関する動詞連用形＋ます」という観点からの変化という点は、不明な点が残されている。

2.2　語用論という観点からの研究―森勇太（2019、2022）

歴史語用論、歴史対照研究という側面からの研究に、森勇太（2019、2022）がある。森（2019）では、洒落本、滑稽本、人情本の丁寧表現の調査をし、「丁寧表現率」、「聞き手配慮率」等を数値として示し、丁寧語の使用を体系的にま

とめている。そして、どのような人物がどのような品詞で丁寧表現を用いるのか、その割合から明らかにしている。森（2022）では、森（2019）から洒落本の女性の使用に注目し、詳細な考察を行なっている。丁寧語の高頻度使用者と低頻度使用者が存在すること、統語上の傾向や談話的傾向、社会言語学的要因の指摘もされ多角的に丁寧語の使用について説明している。本稿は、森（2022）が「これまでの敬語の歴史的研究では、敬語形式が使用されるときの条件に着目されることが多く（P.263）」と述べるような、使用されるときの条件に着目している。「聞き手に関する動詞連用形＋ます」と範囲を限定することにより、使用の特徴と変化を明らかにできる部分もあると考えるからである。丁寧語全体を見た考察や語用論的な考察はもちろん必要であるため、これについては森（2019、2022）を参照しつつ、今後の課題としたい。

2.3　問題の所在

先行研究の内容を踏まえて、本稿では以下の二点について述べる。

(1) 近世後期江戸語では、「動詞連用形＋ます」が使用される範囲が限定的であったが、明治期東京語ではその傾向が薄れること。

(2)「動詞連用形＋ます」の表す敬意、使用される人間関係や階層。

以下、3節で調査対象資料と考察方法について述べ、4節で全体の概観と動詞による使用の偏りについて述べ、5節で近世後期江戸語の考察を行ない、6節で明治期東京語の考察を行ない、7節でまとめる。

3.　調査対象資料・考察方法

調査対象資料と考察方法について述べる。

3.1　調査対象資料

近世後期江戸語の資料として洒落本、滑稽本、人情本を、明治期東京語（明治初年から明治20年代まで[3]）の資料として小説を調査した。詳細は最終ページを参照されたい。いずれも会話部分を考察の対象とした。

3.2　考察方法

考察方法は以下の通りである。

---

[3] 明治20年代まで（明治29年まで）としたのは、近世後期江戸語との比較をする上で、階層という観点から上下関係を考えることができる時期だと考えたためである。今後、必要に応じて明治45年までの資料も扱うつもりである。

・聞き手に関する尊敬表現形式（「お～なさる」等）と「聞き手に関する動詞連用形＋「ます」」が文末で用いられる例を考察対象とする。「聞き手」とは敬語的人称のⅡ人称を指す[4]。
・話し手と聞き手の上下関係、性差、階層差という観点から、「動詞連用形＋ます」の表す敬意と特徴について考察を行なう（5節、6節）。上下関係は、身分による上下関係や互いに用いる表現、本文中の説明等から判断した。

4.　近世後期江戸語から明治期東京語における使用の概観と動詞の偏り

近世後期江戸語から明治期東京語における待遇表現の使用について、各表現の使用をまとめると次の【表1】のようになる。いずれもⅡ人称で使用された用例数を示す。

【表1】近世後期江戸語から明治期東京語における使用率の変化

	対象の表現	下位分類／時期	近世後期江戸語		明治期東京語		
①	尊敬表現形式＋ます	お～あそばします	12	2.0%	4	1.0%	↓
		お～なさいます	70	11.6%	30	7.2%	→
		～なさいます	2	0.3%	0	0.0%	↓
		お～になります	2	0.3%	31	7.4%	↑
②	尊敬表現形式	お～あそばす	5	0.8%	5	1.2%	→
		お～なさる	81	13.4%	60	14.4%	→
		お～になる	0	0.0%	3	0.7%	↑
		～なさる	63	10.4%	10	2.4%	↓
③	お～でございます	―	26	4.3%	33	7.9%	→
④	お～です	―	1	0.2%	29	7.0%	↑
⑤	お～だ	―	257	42.6%	102	24.5%	→
⑥	れます・られます	―	1	0.2%	4	1.0%	↑
⑦	動詞連用形＋ます	―	83	13.8%	106	25.4%	→
	合　計		603	100.0%	417	100.0%	

※使用率が2倍以上上昇の場合に「↑」、2分の1以上下降の場合に「↓」、それ以外に「→」を付す。

【表1】中、①～⑥の尊敬表現形式の詳しい使用や特徴、相互の関係については山田（2013a、2013b、2014）等でまとめた。ここで注目したいのは、⑦「動

[4] 敬語的人称とは、菊地康人（1994・1997）による分類方法である。Ⅰ人称は「話し手側の領域の人物」、Ⅱ人称は「相手側の領域の人物」、Ⅲ人称はⅠ人称やⅡ人称以外の純粋なⅢ人称となる（P.119）。

詞連用形＋ます」である。前述したように、「動詞連用形＋ます」は、近世後期江戸語では待遇表現の体系表（山崎（1966）、小島（1974））にはなく、明治期東京語の体系表（小島（1974））に見られるようになる。【表 1】の使用率を見ると、近世後期江戸語では 13.8%、明治期東京語では 25.4% であり、2 倍まではいかないものの、増加傾向が認められ、使用率という点から先行研究を認めることができる[5]。ただし、近世後期江戸語においても 13.8% の使用が見られることから、「動詞連用形＋ます」が他の尊敬表現とどのように使い分けられ、位置づけられていたのかを確認する必要はあるだろう。

次に、どのような動詞とともに「動詞連用形＋ます」が使用されているのかを見る。用例を見ていると、「動詞連用形＋ます」で使用される動詞は、「あなたは……ができる」、「あなたは……がわかる」、「あなたは……が痛む」等の「ハガ構文」に偏りが見られた。そこで、「a ～は……が」（以下、「動詞 a」）と「b それ以外」（以下、「動詞 b」）に二分して、【表 2】にまとめた。「計」が 10 例以上の表現については、使用率が高い方に網掛けを付した。

【表 2】「動詞連用形＋ます」で用いられる動詞

表現	時期	近世後期江戸語						明治期東京語					
	下位分類／分類	動詞 a		動詞 b		計		動詞 a		動詞 b		計	
尊敬表現形式＋ます	お～あそばします	1	8.3%	11	91.7%	12	100.0%	1	25.0%	3	75.0%	4	100.0%
	お～なさいます	5	7.1%	65	92.9%	70	100.0%	1	3.3%	29	96.7%	30	100.0%
	～なさいます	0	0.0%	2	100.0%	2	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	100.0%
	お～になります	1	50.0%	1	50.0%	2	100.0%	3	9.7%	28	90.3%	31	100.0%
尊敬表現形式	お～あそばす	0	0.0%	5	100.0%	5	100.0%	0	0.0%	5	100.0%	5	100.0%
	お～なさる	1	1.2%	80	98.8%	81	100.0%	0	0.0%	60	100.0%	60	100.0%
	お～になる	0	0.0%	0	0.0%	0	100.0%	0	0.0%	3	100.0%	3	100.0%
	～なさる	1	1.6%	62	98.4%	63	100.0%	0	0.0%	10	100.0%	10	100.0%
お～でございます	—	0	0.0%	26	100.0%	26	100.0%	0	0.0%	33	100.0%	33	100.0%
お～です	—	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%	1	3.4%	28	96.6%	29	100.0%
お～だ	—	1	0.4%	256	99.6%	257	100.0%	3	2.9%	99	97.1%	102	100.0%
れます・られます	—	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%	0	0.0%	4	100.0%	4	100.0%
動詞連用形＋ます	—	58	69.9%	25	30.1%	83	100.0%	59	55.7%	47	44.3%	106	100.0%
合　計		68	—	535	—	603	100.0%	68	—	349	—	417	—

[5] 山田（2015）で述べたが、「動詞連用形＋ます」の使用は、聞き手に関する動詞に下接する例が極めて少なく、それ以外の用例数は多いという傾向が見られる。

【表2】を見ると、本稿が対象とする「動詞連用形＋ます」は、「動詞a」での使用率が高いことがわかる（近世後期江戸語が69.9%、明治期東京語55.7%）。そして、明治期東京語になると、「動詞b」の使用率が上昇していることがわかる。接続できる動詞に変化が生じたと考えられる。「動詞a」は、「題目説明関係[6]は基本的には、主体と属性の関係が把握できるXとPの間においてXに対してその属性Pを説明として与えることで成立する（丹羽哲也（2003）P.58）」と説明される。たとえば、「太郎は花子を見かけた」について、「花子を見かけた」という偶有的属性を「太郎」に対して与えることで、「太郎」の説明を果たすという関係になっている（丹羽（2003）P.58）」と考える。このように、「動詞a」は、聞き手に対してその属性を説明として与えていることから、聞き手に対して直接の敬意を表す表現ではないと考えることができる[7]。以下の例1、2は近世後期江戸語の例（例1は「動詞a」、例2は「動詞b」）、例3、4は明治期東京語の例（例3は「動詞a」、例4は「動詞b」）である。

（例1）否ゝゝかへ。ヲヤきついお愛相づかしだネ。大分ぞりゝゝが生ました。（中流女性おいか→中流女性おたことその娘）【〈対等〉】［『風呂』三編巻之下186］〈a〉[8]

（例2）あぶねへ事をしやした。（商人→中流男性左次郎）【〈下→上〉】［『八』三編追加194］〈b〉

（例3）エ。さうですか。それハ實に賀すべしです。シテどうしてわかりました。（書生小町田→書生守山）【〈対等〉】［『当生』第2回158］〈a〉

（例4）阿郎々々。お風を引きますよ。阿郎。（妻→夫）【〈対等〉】［『二人』上之巻（五）215］〈b〉

以上、「動詞連用形＋ます」について、使用率からの概観と用いられやすい動詞の特徴について述べた。近世後期江戸語から明治期東京語にかけて、「動詞連用形＋ます」の使用率が上がっていること、聞き手に関する動詞での使用に限定した場合、「動詞連用形＋ます」は尊敬表現形式（【表1】の①～⑥）と

---

6 「題目説明関係」とは、「「は」の構文を「XはP」という形で表すとすると、題目説明関係は「XについてPと説明する」関係（丹羽（2003）P.57）」である。

7 なお、敬語的Ⅱ人称の用例を収集しているため、「聞き手の髪型」や「聞き手の立場」等、所有者敬語と考えられる例も含まれる。

8 用例は（話し手→聞き手）【〈上下関係〉】（『資料名の略』巻やページ）〈動詞の分類〉と記す。注目した箇所には点線を付す。

ともに使用されていたこと、その中でも、「動詞 a」での使用に偏りが見られることを指摘した。「動詞 a」は、性質上、聞き手に直接敬意を表さないため、近世後期江戸語では必要とされた場合に使用されたと考えられる。しかし、明治期東京語になり、「動詞 b」の使用率が上がることから、「動詞連用形＋ます」も聞き手に対して直接的な敬意を表すことができるようになったのではないかと考えられる。

5. 近世後期江戸語における「動詞連用形＋ます」の使用

第 5 節では、第 4 節の動詞の偏りも踏まえつつ、町人の使用（中流以上の人々と下層の人々の使用）を中心に、上下関係ごとに用例を見ていく。話し手と聞き手の上下関係ごとの用例数の分布を示すと、次の【表 3】のようになる。

【表 3】近世後期江戸語における使用

階層	中流以上の人々			下層の人々			芸妓			合計
表現／上下関係	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	
動詞連用形＋ます	11（8）	41（27）	3（2）	13（8）	1（1）		10（8）	4（4）		83（58）

※表中の（　）は、「動詞 a」の内訳を示している。

(1)〈下→上〉の関係

【表 3】から〈下→上〉の関係での使用は、すべての階層で使用されたことがわかる。性差による偏りは見られなかった。ただし、「動詞 a」の使用に偏りが見られる。以下の例 5、6 は中流以上の人々の使用例である。くだけた場面（例 5）でも、懇願するような場面（例 6）でも使用されている。

（例 5）モシどふも湯は臺質が一番よふごぜへます。しかし今朝は、おめへさん、すてきにお眼がはやくさめましたネ。（中流男性由次郎→中流男性客藤兵衛）【〈下→上〉】［『梅児』三編巻之八 156］〈a〉

（例 6）アノお金がいくらあると丹さんを堪忍する事が出来ますヱ。（中流女性お長→▲●悪者）【〈下→上〉】［『梅児』後編巻之五 120］〈a〉

例 5 は料理茶屋の息子からその客である中流男性に対して使用された例である。普段からの知り合いであり、くだけた会話である。例 6 は中流女性が自分の許嫁である丹次郎を助けるために悪者に対して使用した例である。したがって、「動詞連用形＋ます」は、〈下→上〉の関係で場面に関係なく使用されるが、

「動詞 a」の場合に偏る。

以下の例 7 は下層町人の使用例である。

(例 7) アイといふにさ。おまへさん、そんなにあがると腹が痛くなりますよ。これでお仕舞だヨ。(乳母→お嬢さん)【〈下→上〉】[『床』初編下 304]〈a〉

例 7 は乳母が自身が仕える「お嬢さん」に対して用いた例である。例 7 のように、下層町人が「動詞連用形＋ます」を使用する場合、最高敬語ではない「お～だ」(点線部) を使用したり、「～なさる」を使用する間柄での使用が目立った。〈下→上〉の関係では、「動詞 a」の場合であっても、「お～なさいます」や「お～あそばします」を用いることが多いと考えられる。

(2) 〈対等〉の関係

〈対等〉の関係で使用される例について【表 3】を確認すると、すべての階層で使用が見られたことがわかる。下層の人々と芸妓の使用はすべて「動詞 a」での使用であるが、中流以上の人々は、「動詞 a」での使用に偏りは見られるものの、「動詞 b」での使用も見られる。

次の例 8 は下層同士の例である。

(例 8) 聞と直に知れますヨ。(下層女性お花→下層男性金太郎)【〈対等〉】[『江戸紫』三編中巻 94]〈a〉

例 8 の話し手は主人とともに訪問し、その家の下男と話す場面で使用している。初対面での丁寧な言葉遣いで使用している。

以下の例 9、10 は中流以上の人々の使用例である。

(例 9) 何と大愚さん、助太刀をしてお呉んなさることは出来ますめへか。(中流男性喜次→中流男性大愚先生)【〈対等〉】[『七』上巻・三編下 244]〈a〉

(例 10) アイさやうゝゝ、紋の付た櫛ゝゝでヲホゝゝゝ。よくお言をおっしゃる。ネエおまへさん、ちょっとお聞なさいまし。櫛、紋有てツサ。アハゝゝゝゝなかゝゝわかります。(中流女性おたこ→中流女性おいかの娘)【〈対等〉】[『風呂』三編巻之下 186]〈a〉

例 9 は中流男性同士、例 10 は中流女性同士で用いられた例である。例 9 や

例 10 では、「てお呉んなさる」や「おっしゃる」、「お聞なさいまし」等とともに用いられていることから丁寧な言葉遣いで話す場合に使用されることがわかる。同じ話し手と聞き手の会話の中で「尊敬表現形式＋ます」と「動詞連用形＋ます」が使用された例も見られた。以下の例 11、12 は中流女性から中流男性に対して用いられた例である。

（例 11）モウ〳〵あなたはなぜそのやうにわたくしが申すことを。おうたがひあそばしますへ。（中流女性おかめ→中流男性金之助）【〈対等〉】［『仮名』前編中 261］〈b〉
（例 12）わかりませんかへ。あなたのことさ。（中流女性おかめ→中流男性金之助）【〈対等〉】［『仮名』前編上 251］〈a〉

例 11 では「お～あそばします」が、例 12 では「動詞連用形＋ます（動詞 a）」が使用されている。話し手と聞き手は親しい間柄ではあるが、話し手は聞き手に対して、高い敬意を表す対称代名詞「あなた」や「お～あそばします」を用いていることから高い敬意を示していることがわかる。このような場合でも「動詞連用形＋ます（動詞 a）」は用いられる。

以下の例 13、14 は中流男性同士での使用である。

（例 13）イヤこれハおめづらしい、なんと思しめしておいでなさつた。（中流男性左次郎→中流男性質兵衛）【〈対等〉】［『八』四編下巻 217］〈b〉
（例 14）ゆふべはよく出来やしたぜ。（中流男性左次郎→中流男性質兵衛）【〈対等〉】［『八』四編追加下巻 257］〈a〉

例 13 は「お～なさる」、例 14 は「動詞連用形＋ます（動詞 a）」の使用例である。話し手の左次郎は「おめづらしい（点線部）」と言い、聞き手の質兵衛は「とんと御無沙汰ばかり、何か用事がなければ上りません（P.218）」と言うことから二人の関係には距離がある。このような場合も「動詞連用形＋ます（動詞 a）」は使用される。したがって、丁寧な言葉遣いで話す場合に場面を問わず用いられると考えられる。

また、「動詞 b」の例は、次のように「する」や「言う」の使用であり、動詞の種類が少ない。

（例 15）夫共井筒か一力あたりで喧しくでもいい舛か。（中流女性お政→中流男性久七）【〈対等〉】[『分解』179]〈b〉

例 15 は中流女性から情人の中流男性に対して用いていることから親しい間柄での使用である。「動詞 a」の場合と表す敬意に違いは認められないが、使用される動詞は限定的である。

(3)〈上→下〉の関係

〈上→下〉の関係での使用を【表 3】で見ると、中流以上の人々が 3 例（3 例中 2 例は「動詞 a」の使用）見られたことがわかる。また、いずれも男性の使用であった。以下の例 16 は「する（動詞 b）」の例、例 17 は「わかる（動詞 a）〉の例である。

（例 16）左やう〳〵夫がどうしました。（中流男性与四郎→芸妓小万）【〈上→下〉】［『分解』初編巻之上 22］〈b〉

（例 17）ハテ、おめへがたは麁末にしなさるから、金が逃て往ます。奉公人を置けば迚其通りさ。〈中略〉ナわかりましたか。（中流男性晩右衛門→下層男性作兵衛たち）【〈上→下〉】［『風呂』四編巻之上 241］〈a〉

例 16 は中流男性が親しい芸妓に対して用いた例、例 17 は中流男性が下層男性に対して用いた例である。例 16 は丁寧な言葉遣いとして使用している。例 17 は聞き手に「晩右ヱ門さんヱ、なぜ、私等（わつら）には兼ねが持やせんネ」と聞かれたことに対する回答である[9]。文中に尊敬語「しなさる」の使用も見られることから、丁寧な言葉遣いで話していると考えられる。したがって、〈上→下〉で使用される場合、丁寧な言葉遣いの中で用いられる。

(4) 近世後期江戸語における使用のまとめ

第 5 節では、動詞の違いを踏まえつつ、「動詞連用形＋ます」の表す敬意について見てきた。〈下→上〉の関係では、各階層で使用が見られるが、「動詞 a」の使用に偏りが見られる。動詞の性質が「動詞連用形＋ます」の選択に関わっ

9　野田（2003）の現代語の研究では、「非ていねい調の中にていねい形が現れるディスコース」の代表的な二つのうちの一つ、「単に事実を述べる文より、質問のように聞き手に直接、働きかける文では、聞き手をどう扱うかをしっかり考慮するからだと考えられる（P.89）」という使い方を指摘している。現代語との比較において必要な観点であると思われる。今後の課題としたい。

ていると考えられる。〈対等〉の関係では、いずれも丁寧な言葉遣いの中で使用し、尊敬語とともに用いられる。〈下→上〉の関係と同様、「動詞 a」の使用に偏りが見られるが、中流以上の人々の使用では、「動詞 b」の使用も 41 例中 14 例（34.1％）見られた。ただし、「動詞 b」の使用の場合、その種類は限られており、一般的ではなかったと考えられる。〈上→下〉の関係では聞き手に対して丁寧な言葉遣いをする際に男性が用いる傾向が見られた。

6. 明治期東京語における「動詞連用形＋ます」の使用

明治期東京語における「動詞連用形＋ます」の使用状況を階層別、話し手と聞き手の上下関係別に用例数を示すと次の【表 4】のようになる。以下、4 節の動詞による偏りを踏まえつつ、上下関係ごとに使用を見ていく。

【表 4】明治期東京語における使用

階層	中流以上の人々			下層の人々			芸妓			合計	
表現／上下関係	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉		
動詞連用形＋ます	6（3）	81（45）	6（5）		2（0）		5（2）			103（57）	階層不明（対等）3（2）

※表中の（ ）は、「動詞 a」の内訳を示す。

(1)〈下→上〉の関係

〈下→上〉の関係での使用は、中流以上の人々と芸妓に使用が見られた。以下の例 18 は「動詞 a」の例、例 19 は「動詞 b」の例である。

（例 18）儼然たる若婦人が書生風情のお給仕に、ネエ、ソラ、品格が落まさア、お廃なさい／＼悪い事ハ言ません。（書生→中流女性お今）【〈下→上〉】［『緑』前編第十九回 312］〈a〉

（例 19）ヲヤヲヤ旦那ハ御扇子を橋の下へお落しなされて惜い事をしました。（中流女性お君→中流男性青我）【〈下→上〉】［『巷説』初編下の巻 153］〈b〉

例 18 は居候の書生が主人に対して使用した例である。主従関係による〈下→上〉の関係での使用と考えられる。例 19 は点線を付した「旦那」や「お落しなされて」を使用していることから、聞き手に対して敬意を示していることがわかる。次の例 20 は芸妓による使用であり、「動詞 b」の例である。

(例 20) 金尾さん、マア引込んで御出でなさい。ウカ／＼口を御出しなさると御前さんまで掛り合ひになりまさアネ。(芸妓梅次→中流男性金尾)【〈下→上〉】[『花』下編 219]〈b〉

例 20 は話し手が聞き手に対して強気で話す場面で使用している。ただし、点線部「御出なさい」「御出しなさる」「御前さん」等も用いていることから、ぞんざいな言葉遣いではない。

したがって、〈下→上〉の関係では、「動詞 a」の場合でも「動詞 b」の場合でも使用する。「動詞 b」としては例 20 のような「(かかり合いに) 成る[10]」も見られるが、「する」や「言う」等、限定的で近世後期江戸語と共通する。

(2) 〈対等〉の関係

〈対等〉の関係における中流以上の人々の使用は 81 例中「動詞 a」が 45 例、「動詞 b」が 36 例見られた。下層の人々の使用は 2 例中 2 例とも「動詞 b」の例であった。近世後期江戸語では〈対等〉の関係で 41 例中「動詞 a」27 例、「動詞 b」が 14 例であった。

以下の例 21、22 は「動詞 a」の例である。

(例 21) おツかさま　先刻は定めしお腹が立ましたらう。(中流女性お組→継母)【〈対等〉】[『細君』第二回 25]〈a〉

(例 22) 何故親友の交際が出来ませんエ。(中流女性お勢→中流男性文三)【〈対等〉】[『浮雲』第三回 11]〈a〉

例 21 は中流女性が継母に対して、例 22 は中流女性が中流男性に対して用いている。例 21 では、同じ人間関係で、「ごめんあそばしてくださいまし」や「お帰りになった (文中)」等を使用している。例 22 は「遠慮なさる」や「どうなすったの」等とともに用いている。例 21 は遠慮のある間柄、例 22 は親しい間柄であるが、いずれの場合も「動詞連用形＋ます」を使用している。丁寧な言葉遣いで〈対等〉の相手に話す場合に広く使用されたといえる。

以下の例 23、24、25 は「動詞 b」の例である。例 23 は中流女性が医者に対して「知る」を、例 24 は中流男性が中流女性に対して「飲む」を、例 25 は中流女性が中流男性に対して「騒ぐ」を用いている。

---

[10] 「成る」での使用は近世後期江戸語でも使用が見られる。

(例 23) でも、貴下は、貴下は、私を知りますまい（中流女性婦人→医者）【〈対等〉】［『外』（上）41］〈b〉

(例 24) 然し、風邪は注意せんと可かんですな、薬は？はあ、飲みましたか、それは一番可いです。（中流男性柳之助→中流女性お種）【〈対等〉】［『多情』（十一）191］〈b〉

(例 25) 三味線でも弾いて騒ぎましたか。（中流女性お種→中流男性柳之助）【〈対等〉】［『多情』後篇（三）238］〈b〉

例 23、24、25 の例を見ると、〈対等〉の関係では、「動詞連用形＋ます」の使用における動詞の種類が増えていることがわかる。なお、「動詞 a」での使用と表す敬意に大きな差は見られない。

(3) 〈上→下〉の関係

〈上→下〉の関係での使用について、【表 4】を見ると、中流以上の人々の使用が 6 例（うち、5 例は「動詞 a」）見られた。以下の例 26 は教師が生徒に対して用いた「動詞 a」の例、例 27 は中流女性が周りの人々に対して用いた「動詞 b」の例である。

(例 26) 大層六かしい質問が出ましたナ。（教師→生徒）【〈上→下〉】［『緑』前編発端 255］〈a〉

(例 27) 何うしても肯きませんか。それぢや全快つても死でしまひます。可から此儘で手術をなさいと申すのに。（中流女性婦人→周りの人々）【〈上→下〉】［『外』（上）40］〈b〉

例 26 は教師と生徒の会話の中で使用しているが、どちらも丁寧な言葉遣いで話している。例 27 は話し手が自分の希望を聞き入れてくれない聞き手に対して非難するような言い方をする場合に使用している。非難する場合であっても、点線部「死んでしまひます」「手術をなさいと申す」のような丁寧な言葉遣いの中で使用している。したがって、〈上→下〉の関係でも、近世後期江戸語と同様、丁寧な言葉遣いの中で使用される。

(4) 明治期東京語における使用のまとめ

表す敬意という点を見ると、〈下→上〉の関係では、近世後期江戸語と同様、「動詞 a」に偏りがあるが、場面に関係なく用いられる。〈対等〉の関係では、「動

詞 a」への偏りは見られるものの、「動詞 b」に所属する動詞の種類が増加するという変化が見られる。この種類の増加は、中流以上の人々の〈対等〉の関係での使用に見られることから、動詞 b での使用は中流以上の人々の使用が中心であり、ここから広まったと考えることができる。「動詞連用形＋ます」を使用する人物は、同じ聞き手に対して「お～なさる」や「～なさる」等の尊敬表現形式を用いていることから、主として〈対等〉の関係以上で使用された丁寧な表現であったと考えることができる。〈上→下〉の関係でも丁寧な言葉遣いの中で使用されている。

7. まとめ

以上、近世後期江戸語から明治期東京語の使用についてまとめる。

7.1 「動詞連用形＋ます」が使用される範囲の変化（4 節）

「動詞連用形＋ます」は、近世後期江戸語から明治期東京語において、尊敬表現形式とともに用いられていた。ただし、近世後期江戸語では、「動詞連用形＋ます」が使用される範囲が「動詞 a」中心であり、「動詞 b」に含まれる動詞の種類も限定的であった。つまり、現代語のように、直接敬意を表すようになる前段階の様相を捉えることができる。明治期東京語になると、「動詞 b」の種類が増える。これは、明治期東京語になり、「動詞連用形＋ます」が聞き手に対して直接的な敬意を表すことができるようになったと捉えることができる。

7.2 「動詞連用形＋ます」の表す敬意（5 節・6 節）

「動詞連用形＋ます」は、近世後期江戸語、明治期東京語ともに、主として〈対等〉の関係以上で使用される形式であった。当期を通して〈下→上〉の関係で使用される場合、「動詞 a」であるがために使用される傾向がある。〈対等〉の関係で使用される場合、「動詞 a」が中心ではあるが、初対面やくだけた場面等で使用が見られたように、場面に関係なく広く使用していたと考えられる。なお、明治期における「動詞 b」の種類と使用の広がりは、中流以上の人々の〈対等〉の関係から生じていると考えられる。〈上→下〉の関係では、近世後期江戸語、明治期東京語どちらにおいても、丁寧な言葉遣いをする中で使用されている。

8. 今後の課題

本稿では近世後期江戸語から明治期東京語における「動詞連用形＋ます」の使用について、動詞による偏りと表す敬意についての考察を行なった。動詞による使い分けという観点からは、「お＋動詞連用形＋だ」との違いを考える必要があると思われる。今後の課題としたい。

○参考文献

菊地康人（1994・1997）『敬語』講談社学術文庫

小島俊夫（1974）『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院

小松寿雄（1961）「人情本の待遇表現」『國語と國文學』38-4

辻村敏樹・川岸敬子（1991）「敬語の歴史」『講座日本語と日本語教育』10、明治書院

丹羽哲也（2003）「「X は Y が Z」構文の意味構造について」『人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要』54

野田尚史（1996）『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版

野田尚史（2003）「テキスト・ディスコースを敬語から見る」菊地康人編『朝倉日本語講座 8　敬語』朝倉書店

森勇太（2019）「近世後期江戸語における丁寧語の運用」第 368 回日本近代語研究会（2019 年 11 月於二松学舎大学）発表資料

森勇太（2022）「近世後期洒落本の丁寧語の運用―現代の談話資料との対照―」野田尚史・小田勝編（2021）『日本語の歴史的対照文法』和泉書院

山﨑久之（1966）「江戸の庶民語の待遇表現の体系（1）―三馬の作品を中心として」『群馬大学教育学部紀要―人文・社会科学編』16

山田里奈（2013a）「尊敬表現形式「お（ご）～になる」系の使用―江戸末期から明治 20 年代まで―」『近代語研究』17

山田里奈（2013b）「明治 20 年代までにおける〈する・なる〉の尊敬表現形式 ―「お～なさる」、「～なさる」、「お～だ」系を中心に」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』21-1

山田里奈（2014）「江戸後期における〈する・なる〉の尊敬表現―「お～なさる」系、「～なさる」系、「お～だ」系を中心に―」小林賢次・小林千草編『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版

山田里奈（2015）「近世江戸語から明治期東京語における「動詞＋ます」の使用」早稲田大学日本語学会前期研究会（2015 年 7 月於早稲田大学）発表資料

山田里奈（2022）「近世後期江戸語における丁寧な言葉遣い―〈行く・来る〉を例にして―」『近代語研究』23

○調査対象資料　※下線部は資料名の省略形とし、用例に付した情報である

『遊子方言』田舎老人多田爺（1770）（『新編日本古典文学全集』）、『甲駅新話』大田南畝（1775）（『新編日本古典文学全集』）、『古契三娼』山東京伝（1787）（『新編日本古典文学全集』）、『傾城買四十八手』山東京伝（1790）（『新編日本古典文学全集』）、『傾城買二筋道』梅暮里谷峨（1798）（『新編日本古典文学全集』）、『繁千話』山東京伝（1798）（『新編日本古典文学全集』）（以上、洒落本）、『諢話浮世風呂』式亭三馬（1809）（『新日本古典文学大系』）『柳髪新話浮世床』式亭三馬（1812）（『新編日本古典文学全集』）、『四十八癖』式亭三馬（1812）（『新潮日本古典集成』）『花暦八笑人』瀧亭鯉丈（1820）（岩波文庫）、『妙竹林話七偏人』梅亭金鵞（1857）（講談社文庫）（以上、滑稽本）、『仮名文章娘節用』曲山人（1831）（（前編）鶴見人情本読書会（1998）『鶴見日本文学』2、（後編）鶴見人情本読書会（1999）『鶴見日本文学』3、（第三編）鶴見人情本読書会（2000）『鶴見日本文学』4）、『春色梅児誉美』為永春水（1832）（『日本古典文学大系』）、『閑情末摘花』松亭金水（1839）（浅川哲也（2015）『新國學復刊』7（初編～三編）、浅川哲也（2016）『人文学報』512-7、首都大学東京都市教養学部人文・社会系　首都大学東京人文科学研究科）（四・五編）、『春色恋廼染分解』山々亭有人（1860）（浅川哲也（2012）『春色恋廼染分解　翻刻と総索引』（おうふう））、『毬唄三人娘』（初編～三編）松亭金水（1862）（浅川哲也（2011）『人文学報』443（首都大学東京）（初編～三編）山々亭有人（1862）、浅川哲也（2012）『人文学報』458（首都大学東京）（四編・五編））、『春色江戸紫』（初編～三編）山々亭有人（1864）（浅川哲也（2013）『人文学報』473）（以上、人情本）、『萬国航海西洋道中膝栗毛』（假名垣魯文、1870〈明 3〉）（『明治文學全集』）、『牛店雑談安愚楽鍋』（假名垣魯文、1871〈明 4〉）（『明治文學全集』）、『春雨文庫』（松村春輔、1876〈明 9〉）（『明治文學全集』）、『金之助の説話』（無著名（「東京繪入新聞」）、1878〈明 11〉）（『明治文學全集』）、『巷説児手柏』（高畠藍泉、1879〈明 12〉）（『明治文學全集』）、『浅尾よし江の履歴』（無著名（「東京繪入新聞」）、1882〈明 15〉）（『明治文學全集』）、『一読三歎当世書生気質』（坪内逍遥、1885〈明 18〉）（『明治文學全集』）、『新磨妹と背かゞみ』（坪内逍遥、1886〈明 19〉）（『明治文學全集』）、『浮雲』（二葉亭四迷、1887〈明 20〉）（『明治文學全集』）、『ふくさつゞみ』（山田美妙、1887〈明 20〉）（『山田美妙集』2012）、『花間鶯』（末広鉄腸、1887-1888〈明 20-21〉）、『処世写真緑蓑談』（前編 / 続編）（須藤南翠、1888〈明 21〉）（『明治文學全集』）、『この子』（山田美妙、1889〈明 22〉）（『山田美妙集』2012）、『細君』（坪内逍遥、1889〈明 22〉）（『明治文學全集』）、『二人女房』（尾崎紅葉、1891〈明 24〉）（『明治文學全集』）、『黒蜥蜴』（広津柳浪、1895〈明 28〉）（『新日本古典文学大系明治編』）、『浅瀬の波』（広津柳浪、1895〈明 28〉）（『新日本古典文学大系明治編』）、『外科室』（泉鏡花、1895〈明 28〉）（『新日本古典文学大系 明治編』）、『五大堂』（田沢稲舟、1896〈明 29〉）（『新日本古典文学大系明治編』）、『多情多恨』（尾崎紅葉、1896〈明 29〉）（『紅葉全集』）

＊本稿は早稲田大学日本語学会前期研究発表会（2015 年 7 月於早稲田大学）での発表内容を大幅に加筆・修正したものです。また、本稿は JSPS 科研費による若手研究「近世後期江戸語から明治期東京語における丁寧語の体系変化に関する研究」（課題番号：22K13130）の成果の一部です。

（やまだ　りな・実践女子大学専任講師）